

C-1 ジャワ王朝史

243. サイレンドラ王国

ジャワ島中部のソロ河畔のトリニル(→138)で発見された原人類の骨は“ジャワ原人”として知られているように人類の歴史という観点から言うとインドネシアは最も古い地域になる。ジャワ原人はさておいて、その後の有史になってからは紀元前頃からインドの文献に東南アジアが登場してくる。インドネシアを含む東南アジア



トゥグー石碑
2011/7/16 編者撮影

は古くからインド文化の影響を色濃く受けておりインド文化圏に包含される。

西部ジャワにタルマ王国(→260)が存在したことを示す遺跡がある。ボゴールの近くの川の合流点で発見された石碑は絵文字のような南インドのパッラワ文字(→960)で記されている。ジャカルタのトゥグー(→166)でも灌漑工事記念の石碑が発見された。

中国の歴史書では640年に訶陵国^{かりりょう}が唐に朝貢している。訶陵国の所在地は中部ジャワのジャワ海沿岸のプカロンガンと推測されている。訶陵国についてはインド文化の影響を受けた王国であったことを窺わせるが詳細は解らない。ちなみにプカロンガンの東南50kmのディエン高原(→133)には7世紀頃のヒンドゥー教遺跡がある。

ジャワ史が明らかになるのは8世紀頃、クドゥ盆地を基盤に成立したサイレンドラ(Sailendra)王国以降である。始祖はセレンドラ王と推定されている。サイレンドラはサンスクリット語で“山の王”という意味である。王国の版図はスマトラ島、マレー半島にも拡大した。その他に790年頃カンボジアを攻めて12年間占領したことも記されている。王国の最大の偉業はボロブドゥール寺院(→126)の建立である。

サイレンドラ王国は7世紀頃にスマトラ島南東部の今のパレンバンの地に勢力を誇ったスリウィジャヤ王国(→255)と同族関係であったらしい。仏教信仰で栄えた王国は短命(8世紀中頃～832)であったもののその後に続くジャワ王朝の元祖に位置づけられる。

ジャワ人にとって王権とは“万世一系”的なものである。ジャワ王朝の^{かいびやく}開闢以来の王統の正統な継承者である証拠として歴代の王朝からの受け継がれたプサカ(→704)という“神器”のようなものがあるらしい。

インドネシアの歴史といっても狭義の“インドネシア史”は現代史の範囲に限られる。それ以前の古い歴史は島毎に、さらには地域毎に各々が独自の歴史を持っていた。しかし、この中で人口も多く文化も栄えたジャワ島では幾つかの王国が興亡を繰り返しながらほぼ統一された政権の下にあった。

以降のジャワの王権は「サイレンドラ」⇒「古マタラム」⇒「クディリ」⇒「シンガサリ」⇒「マジヤパヒト」⇒「ドゥマック」⇒「新マタラム」の各王国(王朝)に引き継がれた。

¹ 漢文史料の訶陵国の原音については不明であるが、深見純正氏はサイレンドラとしている。訶陵国の起源にはインド、カンボジア、スマトラなどの説がある。〈編者註〉Slamet Muljana氏によると訶陵国とはインドにあったカリンガ国である。

244. 古マタラム王国

ジャワ島のサイレンドラ王国とほぼ同時期に同じジョグジャカルタ周辺にマタラム(Mataram)王国(732～932)も存在した。碑文²によれば732年にサンジャヤ(Sanjaya)王が即位しマタラム王国³の開祖となった。たまたま同地域に二つの王権が分立していたが、政治的関係はよく分からない。

インド文化の影響のもとにサイレンドラ王国は《仏教》を、マタラム王国は《ヒンドゥー教》を国教としていた。ボロブドゥール(→126)やプランバナン(→128)の世界に誇るこれらの遺跡はこれら両王国が残した輝かしいモニュメントである。

それほど広くない地域に二つの王権が存在し、別の宗教を抱きながら併存しえたことは不可解であり古代史の解明が待たれる。現在判明していることを繋ぎあわせるとマタラム王国が本来の地域王権であり、サイレンドラはジャワ北岸からの新興勢力であったらしい。宗教は異なっているが、両王国は本拠地が接近していることから婚姻関係もあった。

初めはサイレンドラ王国の仏教勢力が上回り、ボロブドゥール仏教遺跡にみられるような黄金時代があった。やがてヒンドゥー教の進出が勝るとともに、仏教のサイレンドラ王国は同族と推定されているスマトラ島のスリウイジャヤ王国(→255)に引き上げた。この結果、中部ジャワはマタラム王国に統合された。

プランバナン寺院は最も優れたマタラム王国の文化遺跡であるが、近辺にも多くのヒンドゥー寺院遺跡が散在し、中には仏教との混合遺跡もある。プランバナン遺跡の南2kmの所にあるラトゥゴコ(→128)という小高い丘の遺跡は778年に建設されたマタラム王国のクラトン(王宮)と見なされている。

マタラム王国は以降のジャワのヒンドゥー諸王朝の始祖であり、ヒンドゥー文化の影響はその後イスラム教に改宗したイスラム王朝にも引き継がれてきた。ヒンドゥー的色彩の強い宮廷の存在はジャワ王朝の伝統となり、宮廷文化として現在にいたるも宮廷舞踊などにかいま見ることができる。

ところで、928年、シンドック(Sindok)王の時、マタラム王国は突如として中部ジャワから東部ジャワに移転したため、以降はクディリ王朝(→245)と称される。移転の理由はスリウイジャヤ国の侵攻、地震、伝染病など何かの災害らしい。当時、ボロブドゥール寺院を埋めるほどのムラピ山(→125)の大爆発があり、飢饉、疫病で住民は逃亡したというのが最も有力な説である。

中部ジャワを去ったジャワ王権は東部ジャワに移転した後も連綿と引き継がれた。600年を経た16世紀になって災害も癒えた中部ジャワにジャワ王権はよみがえり、古代の王朝の名にちなみマタラム王国と称した。マタラムとはジョグジャカルタ付近の地域名である。この新しいマタラムは〈古代マタラム〉と区別するため〈新マタラム〉またはイスラム・マタラム(→250)といわれる。

245. クディリ王国

中部ジャワに栄えたマタラム王国は、929年に東部ジャワに遷都してきた。マタラム王の娘を后にしていたシンドック王が東部ジャワ王朝の開祖とされる。王国は1222年のシンガサリ王国成立までの約300年間続いた。

² 〈編者註〉チャンガル(Canggal)碑文

³ マタラム王国は地名にちなむ呼び名であり、サンジャヤ王国ともいう

当初はメダン王国ともいい、王都ワツガル(Watugaluh)の所在地は不明である。後期に東ジャワのブランタス川(→144)中流のクディリ(Kediri)に王都を定めたことから、東部ジャワへの遷都以来を通してクディリ王朝と称している。カディリ(Kadiri)王国またはダハ(Daha)王国ともいわれる。

クディリ王朝は4代目ダルマワンサ(Darmawangsa)王(在位 991?-1016)の頃、東部ジャワを基盤に国際交易に進出し、マラッカ海域に覇権を打ち立てていたスリウィジャヤ王国と対抗するようになり、ジャワ王国の覇権はスマトラ島やバリ島にも拡大した。

ダルマワンサ王によって法典が編纂され、サンスクリット語(→981)のインド文化はジャワ語に翻訳され、ジャワ文化が成立した。

しかしダルマワンサ王はカルカッタ石の碑文によれば 1016 年のプララヤ(大破局)で死に、王国は一時途絶えた。プララヤとは何かについて諸説の中にはスリウィジャヤ王国の襲撃説もあるが、王女とアイルランガの結婚式の最中にイサナ(Isana)宮殿がウラワリ王から襲撃された内乱事件のことらしい。火の海の中で死にひんしたダルマワンサ王は娘婿に後事を託した。

アイルランガ王は艱難辛苦をへて再びジャワを統一し、クディリ王国を再興したジャワ屈指の英雄である。アイルランガ王時代がクディリ王国の栄光の頂点であった。最盛期のクディリ王国の覇権はバリ島、カリマンタン島西南部、ティモール島、スラウェシ島南部、テルナテ島にも及んだ。

1042 年、バリ島を含む東部ジャワ統一の偉業を成し遂げたアイルランガ王は、国土を二人の息子に分け与えて引退した。北部のスラバヤ地方のジャンガラ国(1049-1050)と南部のクディリを都としたパンジャル国である。パンジャル国がジャンガラ国を併合して東部ジャワを統一しクディリを王都とした。

12 世紀前半、ジョヨボヨ(Joyoboyo)王が分裂していたクディリ王国を再統一したといわれる。この王が名を知られるのは、宮廷詩人ウンブ・セダーとウンブ・パヌルーに命じてマハーバーラタの『パラダユダ(→947)(ジャワ人の発音は「バロトユド」)』をジャワ語に訳し、ジャワ文化の血肉にしたことである。

パラダユダは分裂したクディリ王国統一のために払った犠牲に対するジョヨボヨ王の鎮魂書であるといわれる。パラダユダに語られる呪文は^{じゅもん}ジョヨボヨの予言(→299)としてジャワ人の意識に潜在している。

⇒333.アイルランガ王

246. シンガサリ王国

クディリ朝とマジャパヒト王国の間にシンガサリ(Singasari)またはラジャサ(Rajasa)王国という短命の王朝(1222-92 年)があり、クディリよりさらに東のシンガサリを王都とした。始祖ケン・アンロックはクディリ王国を滅ぼし、シンガサリ王国の創始者となった。彼は村のゴロツキという低い身分から領主の妻と通じて領主を殺害して自ら領主になり、さらには王国をも算奪したという一代の^{かんゆう}奸雄である。

後を継いだのは妻の前夫アムトゥン王の子であり、異父弟と対立する。シンガサリ王国の歴代の骨肉の争いはクリスの崇り(→702)として知られる。パララトン(Pararaton)という歴史物語に呪われた王朝としてジャワ人に^{かいしき}膾炙されてきた。シンガサリ王国の芳しくない歴史はマジャパヒトの歴史書『ナーガラクルターガマ(→968)』に記されている。

シンガサリ王国の最後となるクルタナガラ(Kertanagara)王(1268-92)はジャワ島外への膨張政策を採り、スマトラ島のムラユ王国(→258)征服のため遠征軍を派遣し、ジャワの王威は外島に拡大した。一方でクルタナ

ガラ王はヒンドゥー教と仏教を混合し密教にした。その傾倒ぶりは今日もシンガサリ寺院遺跡(→146)に仏教・ヒンドゥー教芸術の栄華の痕跡を留めている。

海外遠征、寺院建築と人民に重くかかる負担から民心はクルタナガラ王を離れていった。兵を外国に出している隙に国内の反乱があい生じた。最初にマドゥラ総督ウイラジャが叛乱した。彼は王に諫言したためマドゥラ島に遠ざけられていた。王国の守備軍が北に誘き出された所をダハの守将ジャヤカトワンが王宮に攻め入り波乱のシンガサリ王国は幕を閉じた。

クルタナガラ王の厄介な置き土産は“蒙古襲来”であった。文永の役(1274年)、弘安の役(1281年)と日本侵略に失敗した蒙古は矛先を南に向けた。クルタナガラ王生存中にフビライ皇帝からジャワ王自ら朝貢し恭順の意を求める使者が数回ジャワ島を訪れていた。居丈高な要求に対して1289年に王は元使節の長猛漢⁴の顔に入れ墨をして追い返した。北条時宗が元の使者の杜世忠を切り捨てた行為と対比される。

元の使者へ与えられた侮辱はフビライ皇帝を激怒させ、福建、江西、湖広三省から精鋭2万人、船舶1千隻、糧食1年分からなるジャワ遠征軍が、1293年に派遣された。蒙古襲来とその防戦は日本とジャワの歴史上の輝かしい共通体験⁵である。

クルタナガラ王については偉大な王であるという評価と、治世に稚拙な面があり、したい放題の迷惑な暴君であったという評価が相対している。

一般に歴史書は現王朝を称えるためには先行する王朝の諸悪を誇張するものであるが、マジヤパヒト王国の開祖ラデン・ウィジャヤはクルタナガラ王を称えた。ラデン・ウィジャヤはクルタナガラ王の娘婿であることに王権の正当化を求め、クルタナガラ王の墓所シンガサリ寺院はマジヤパヒト王家の子孫によって建てられた。

⇒334.ケン・アンロック王

247. マジヤパヒト王国の元祖

シンガサリ王国の後継を争う者に3人の武将がいた。最初に叛乱の狼煙^{のろし}をあげたのはマドゥラ総督ウイラジャ(Wiraraja)である。クルタナガラ王を直接に滅ぼしたのはダハの守将ジャヤカトワン(Jayakatwang)である。もう一人のクディリ防衛軍の指揮官ラデン・ウィジャヤ(Raden Wijaya -1309)は外島の戦線から帰国してウイラジャを頼り、赴任地のマドゥラ島に渡った。

とりあえず前王朝クディリの末裔と称するジャヤカトワンが王位を得るも他の二者にも野心があった。日本の南北朝の頃の武将の駆け引きと同様の状況である。

当面の差し迫る元軍の来寇(1293年)に対して三者は共同して対戦することとした。ブランタス河口のパチカン(現在のスラバヤになる)の会戦でジャワ連合軍は元軍と対戦したが、緒戦で破れるや三者はお互いの思惑を秘めて退却した。

そこでラデン・ウィジャヤは密かに元軍に降伏を申し出、その証としてジャワの国土を示した山川の地図を差し出した。元軍はラデン・ウィジャヤを信用して連合軍を結成し、ダハに陣取るジャヤカトワンに迫った。ジャヤカトワンは兵力の数では勝るも元軍の新兵器の威力に屈して滅びた。

⁴ <編者註>使者は「孟棋」という名であった。

⁵ 蒙古軍の日本への遠征は文永の役(1274年)は3万人、弘安の役(1281年)は14万人の規模からなる。ジャワ島遠征(1293年)は2万人であり、日本と比べると遠征規模が小さい。これには弘安の役の14万人兵士のうち10万人は南宋の投降兵であり、フビライに棄民政策の思惑があったようであり、兵士の数字だけの遠征の比較は注意が必要である。

クルタナガラ王の娘 4 人と結婚しているラデン・ウイジャヤは一旦はジャヤカトワんに臣従したものの内心では前王に対する反逆者と見なしており、復讐の好機を逃さず元軍の兵力を利用してジャヤカトワンを滅ぼした。

その後のラデン・ウイジャヤの行動は素早かった。ジャワ軍を破った元軍は上陸以来3ヶ月たって熱帯の地に倦み⁶油断が生じた。これを見てラデン・ウイジャヤは元軍に叛旗をひるがえし、元軍はほうほうのていで海岸に辿り着き中国へ逃げ帰った。フビライ皇帝は怒り司令官は処刑され、ジャワ島に再征すべく準備をしたが翌年に没した。

結果として元寇という国難はラデン・ウイジャヤの天下争奪に利した。こうしてジャワの最高実力者となったラデン・ウイジャヤはマジャパヒト王国の始祖となり、クルタラージャサ (Kertarajasa) 王と改名した。クルタナガラ王の後継者という意味であろう。ちなみに血統が歪^{いびつ}なシンガサリ王朝においてクルタナガラ王は如何わしいケン・アンロック(→334)でなく、由緒正しいアムトゥン王の方の血統である。

ラデン・ウイジャヤが当初ジャヤカトワンから与えられた領地はブランタス川(→144)下流の荒れ地であった。最初に訪れた際にマジャという木の実が苦い(パヒト)かったことがマジャパヒト(Majapahit)の命名の由来である。その変な名の王国もジャワの中で最も栄華を極めた王朝として後世にその名を知られる。

新王国が安定にいたる過程には反乱などで多くの血が流された。1309年の王の死後、一人息子ジャヤナガラ(Jayanagara 在位 1309-28)王が継ぐが、継嗣を残すことなく死去した。異母姉妹によって暗殺されたい。ガジャ・マダ(→335)が仕掛人という説もある。

248. 栄光のマジャパヒト

歴代のジャワ王朝の中でも特筆に値するのが、マジャパヒト(Majapahit)王国(1293-1527)である。ラデン・ウイジャヤが創設し、クルタラージャサ王と名乗った。2代目ジャヤナガラ王の死後は異母姉妹のトリブワナー(Tribhuwana 在位 1328-50)が第3代の王になった。その母のラージャパトニ(Raja Patni)はクルタナガラ王の娘であり、クルタラージャサの正妃であった。ラージャパトニは娘を王位に付け自ら摂政となり、政治をガジャ・マダ宰相に任せた。西太后のような存在であったらしい。

3代目の女王の後、4代目に息子ハヤム・ウルク(Hayam Wuruk)が即位し、ラージャサナガラ(Rajasanegara 在位 1350-89)王と称した。マジャパヒト王国はラージャサナガラ王の頃がその黄金時代の頂点であった。強力な海軍のもとに海陸大帝国ともいべきその版図はマレー半島からフィリピンの南部に及んだ。ここにジャワ王朝はジャワ島という枠を抜け出した東南アジア島嶼部に君臨する帝国時代を築いた。

中部ジャワに始まるジャワの王権はクディリ朝になって東部ジャワの山間の盆地に移り、マジャパヒト王国になってブランタス川(→144)を下りジャワ海の河口に近いトロウラン(→142)に王都を設けた。

ジャワの法典が整備されジャワ文学が形成されたのもマジャパヒト王国の時代である。ワヤン、ガムランなどジャワ独特の芸術が振興しジャワ文化が確立された。数多くのヒンドゥー教寺院も建設され、パナタラン寺院がその代表である。その後、ジャワ島はイスラム教に改宗したためヒンドゥー寺院(チャンディ)は荒れ果てているが、トロウラン遺跡になおその栄華を偲ぶことはできる。

⁶ <編者註>元軍の軍装は熱帯仕様でなかったため体力を消耗したとともに将兵がマラリアに感染したため兵力が弱っていた。

宮廷詩人ブラパンチャの叙事詩ナーガラ・クルターガマ(→968)はマジャパヒト王国の歴史を物語る長編の讃歌である。マジャパヒトの名はジャワの輝かしい歴史としてジャワ人の銘記するところとなった。

後世のオランダ植民地という異民族支配の下で澎湃^{ほうはい}としておこるインドネシア民族意識において、ジャワ古代王朝のマジャパヒト王国の存在の事実と栄光の記憶が、インドネシアの統一と領土の正当性のよりどころとなった。スカルノ大統領の格調高い演説にもマジャパヒトの名はしばしば引用された。

マジャパヒト王国に不可欠の屈指の英雄は国王ではなくて、ガジャ・マダ大臣である。彼は親衛隊長から摂政ラージャパトニの信を得て、昇進して3代の王に仕え 34 年間大臣の職にあった。マジャパヒトの栄光はガジャ・マダ大臣の名とともにある。

王都には東西二つの王宮(プラ)があり、王族が分かれて居住し行政機能も分担していた。ガジャ・マダ大臣の生存中はうまく機能したが、その後、両プラの存在は勢力の誇示争いから権力闘争に深化し、ガジャ・マダ大臣没後のマジャパヒト王国は次第に弱体化⁷した。やがてマジャパヒト王国は中部ジャワ北岸にイスラム教のもとに新興してきた港市都市の盟主ドウマック王国によって取って代わられた。 ⇒335.ガジャ・マダ宰相

249. ドウマック王国の勃興

マジャパヒト王国(→248)最後の王はブラウイジャヤ7世(Prabu Brawijaya)である。マジャパヒト王国を倒して「ドウマック(Demak)王国」の建国者となった王子ラデン・パタ(Raden Patah)はブラウイジャヤ王とチャンパ⁸出身の中国人王妃⁹の間に生まれた子供といわれる。息子のラデン・パタは母親の影響でイスラム教に改宗した。ワリ・ソゴ¹⁰(→712)の一人に数えられることもある。

ブラウイジャヤ7世はヒンドゥー教とイスラム教の間で動揺するが、イスラム教への改宗を拒否し息子に攻められた。崇拝するグル(師)から王国の命運は残り 40 日であると告げられ、39 日目に従順として死におもむき、1520 年にマジャパヒト王国は終える。ヒンドゥー教に従い火葬にすることが最後の遺言であった。忽然と井戸の中へ消えたという伝説もある。

マジャパヒト王国の衰退は内紛もあるが、東南アジアを取り巻く状況の変化である。交易の中心はイスラム教を奉じるマラッカ王国に移り、イスラム教の影響がジャワ島に及んだ。ヒンドゥー教を奉じる大帝国マジャパヒトの覇権は次第に色褪せ、領土はイスラム勢力によって蚕食^{さんしょく}された。

ワリ・ソゴというイスラムの先導者が時代の人であった。パシシル(→136)というジャワ海沿岸の港市都市はイスラム教を奉じるようになり、ジャワの覇権はこれらの港市都市に移った。その中でドウマック王国が抜きん出た。

⁷ 明の永楽帝の発した鄭和の艦隊はジャワ北岸を基地としてインド洋へ使節を出した。その頃マジャパヒト王国は内部抗争で衰退傾向にあり、鄭和は王国の内部抗争に乗じてジャワ北岸を中国の庭先のように利用していた。

⁸ チャンパは現在のベトナム中央部に存在した王国である。オーストロネシア語族に属しインド文化の影響を受けていたが、イスラム教の進出に伴いイスラム教徒になった。海洋国として東南アジアの交易に携わっておりジャワ人、マレー人、アラビア人、インド人、中国人が往来した。北方からのベトナム人の圧力が増し、チャンパの民族は分散し、現在ではインドシナ半島各地にイスラム教徒の少数民族として生存している。

⁹ <編者註>Surat Kanda によると華人商人 Ban Hong の娘である。

¹⁰ <編者註> 原文では「ワリ・ソング」となっていた。最後の音の「ゴ」は鼻濁音であるので現地での発音に合わせて「ワリ・ソゴ」と修正した。なお、日本語で鼻濁音を使うのは関東以北のみのものである。

ドゥマックは中部ジャワ北岸のジャワ海に面する港市である。ジャワ島でいち早くイスラム化の波が及び、15世紀後半にムスリム華僑がこの町を建設したと伝えられている。建国者であるラデン・パタの母の影響でドゥマック王国には中国文化の影も見える。

ラデン・パタは西部ジャワではバンテン王国(→261)およびチルボン王国(→262)の勢力拡大を助け、ジャワ海北岸一帯にイスラム教を普及させた。そしてまた東方に対しては1527年にトゥバン(→137)を征服し、以後1545年までの間に東部ジャワの大半を占領した。

ドゥマック王国2代目トルンガナ(Trenggono)王は義理の息子のジョカ・ティンキル(Joko Tinggir)を中部ジャワの内陸部を統治させた。彼はパジャン(Pajang)王国と名乗り、ソロ近くに王宮を建設した。

ジョカ・ティンキルの家臣、パマナハンはマタラムの地を得て独立しマタラム王国の元祖となった。パジャン王国(1528-84)は3代で滅びた。

ドゥマック王国の退潮に伴い交易の中心はジュバラに移った。ジャワの王権はイスラム教を奉じるものの、所在箇所は海岸部から中部ジャワの内陸部へ移転した。後継のマタラム王国は内陸の農業基盤の王国であった。ジャワ勢力が海岸地域から撤退することにより、パシシルには新興のオランダ東インド会社(→272)が進出してきた。

⇒136.パシシル・中部ジャワ

250. 新マタラム王国

中部ジャワのマタラムといわれるジョグジャカルタ近辺はボロブドゥール寺院(→126)やプランバナナ遺跡(→128)がある古代王国の所在地であるが、ムラピ火山の爆発でジャワの王都は東部ジャワに移り人口も減っていた。16世紀になると中部ジャワに再び豊沃な生産力が蘇り、米の生産地として東南アジア島嶼部の交易に重きをなした。

スラカルタのパジャン国とジョグジャカルタのマタラム国は中部ジャワの農業を基盤に輩出した新興勢力であった。マタラム王家始祖スノパティの父パマナハン(Pemanahan)はマジヤパヒト王国の代官としてジョグジャカルタの南郊のコタ・グデ(→123)付近で勢力を築き、イスラム教に改宗していた。マタラム王家の年代記によるとマジヤパヒト王族の後裔であるが、かなり怪しげである。

スノパティ(Senopati? -1601)の時代にマタラム国がパジャン国を併合して中部ジャワを統一しマタラム王国を創立した。即位に際してスノパティは女神ロロ・キドゥル(→949)と交信(交情のこと)を行い、女神の加護を受けることになった。マタラム王朝の始祖にちなむ女神ロロ・キドゥルの加護は血統に代わるジャワ王朝の正統性の神話の創作であろう。イスラム教色の強いジャワ北岸のマレー的文化と伝統のジャワ的文化のハイブリッドがマタラム王国の根源である。

第2代パネンバハン・セダ・クラブヤック(Krapyak)王(在位1601-13)はコタ・グデに王宮を設け、スラバヤを攻めた。第3代が英傑スルタン・アグン王である。

勢力を飛躍的に拡大した新マタラム王国は16世紀末に中部ジャワの農業経済力を基盤に、衰退期にさしかかっていたジャワ北岸のドゥマック、ジュバラなどの交易都市を勢力下に置き、東部ジャワの内陸部にも影響を及ぼした。オランダ東インド会社(VOC)(→272)のスラバヤ商館を攻め滅ぼし、VOCの牙城であるバタビア商館(→274)を大軍で包囲し陥落寸前まで追いつめた。

バタビア要塞の攻略を中断したスルタン・アグン王は矛を転じてジャワ各地に遠征し、ジャワ島は再び統一

され、マタラム王国の覇権は近隣の島々に及んだ。

しかしマタラム王国の意図はマジヤパヒト王国の復活でなく、クジャウエン(→119)を基盤とする農本主義王権の復活であった。商業とか貿易に疎い田舎王国はパシシル(→136)の富を私物化することにしか関心がなかった。

父スルタン・アグンを継いだ第4代 アマンクラット(Amangkurat)1世(在位 1646-77)は VOC の存在¹¹を認める条約を締結した。条約は王国の面子をたて会社側が和を請うものであったが、実質はVOCが取った。

VOCに高価な貢物を献上させることを国威と勘違いをした王は各地の領主を首都に集め(参勤交代である)、徴税に励んだ。住民の海岸部への移動を禁じ、海外渡航も禁止(鎖国令である)した。VOCは王室をたらしこみ貿易独占の特権を得た。

⇒337.スルタンアグン王

251. 王位継承戦争

アマンクラット 1 世はジャワ史上有名な暗君である。王は中央集権を強引に進めたことから地方貴族の不満を招き、マドゥラ島のトルノジョヨ王子(→263)が反乱した。反乱軍に王都を占領され王家のプサカ(→704)も持ち去られた。王に残された唯一の味方である VOC(→272)の保護下で 1677 年に病没した。ジャワ王室が VOC に屈するようになった原因は全てアマンクラット1世に発する。アマンクラット1世 30 年の治世は長すぎた。

アマンクラット1世以降のマタラム王国のやったことは日本の織豊政権から徳川政権への移行に類似している。三河の百姓政権が堺や博多の貿易の芽を摘み、鎖国令という愚行の中に 200 年間も閉じこもったのと同じ発想である。

日本は西欧諸国から遠かったこと、ジャワ島ほど魅力のある物資がなかったため、文字通り鎖国を実施した。日本の鎖国は徳川家を 15 代にわたって維持するためには有効であったが、日本のためには迷惑この上ない愚策であった。この間に日本は著しく退化した。もしオランダがジャワ島でなく日本へパワーを集中していたら、徳川政権は手始めに九州から瀬戸内沿岸の商権を売り飛ばして涼しい顔をしていたであろう。

ジャワ島がオランダに侵略される歴史を検証するとマタラムと徳川は同じ体質である。日本が植民地にされなかったのは置かれた状況の差による僥倖^{きようこう}にすぎない。ちなみに著者である私は関西生まれの関西育ちで、生理的な徳川嫌いである。

王室と VOC のもたれ合いは次第に VOC の介入を招くようになった。第5代アマンクラット2世(1677-1703)は VOC の援助でトルノジョヨの反乱を鎮圧した。以降、ジャワ王室は VOC の介入を許し、請われるままにジャワ海沿岸の貿易商権を VOC に切り売りした。

第6代アマンクラット3世(1703-08)は反 VOC 言動のため、VOC に嫌われて退位させられ、パク・ブウォノ(Pakubuwono)1 世(1704-19)が就いた。憤懣^{きんげん}やるかたないアマンクラット3世は折からのスロパティ(→143)の VOC に対する反乱に合流するが、1708 年に捕らえられた。第一次継承戦争である。

¹¹ 1646 年に VOC が和を請い貢物の提供と臣従の協定を締結した。1674 年のトルノジョヨの反乱でアマンクラット1世が VOC に援軍を求める際には王室と VOC の位置関係は逆転した。VOC が王室を支える不可欠な存在になってからは VOC の創始者がジャワであるという虚構を作り上げた。クーン総督はスペイン商人スクムルとパンジャラン王国の王女の間にも生まれた子供であるというものである。

パク・ブウォノ1世に次いでアマンクラット4世(1719-26)が即位すると王族の大部分が反乱するが、VOCの武力で鎮圧した。第二次継承戦争である。VOCは資金と武力援助の見返りを王室に要求したが、王室には国土以外に何も無かった。継承戦争で貧乏になった王室はVOCに借金の担保としてジャワ海沿岸の商権と領土を差し出した。

次ぎに即位したパク・ブウォノ2世(1726-49)はVOCに取られた領土を機会があれば取り返そうとした。1740年、バタビアの紅河事件(→667)といわれる華僑の叛乱を聞く直ちに加勢を表明しVOCに叛旗を翻した。しかし華僑の反乱はあつげなく鎮圧されて一層まずい結果になった。

ジャワ北海岸の領土は次第に蚕食され、1746年に全パシシルの権益はVOCにゆずられた。ついでに王国の人事任命権もVOCに与えた。1749年には後継者問題が暗礁に乗り上げ、王は死の前に王国そのものを会社に譲渡¹²した。

252. マタラム王家の分割

第一次ジャワ王位継承戦争、第二次継承戦争に続き、第三次継承戦争(1749-57)は最も激しかった。パク・ブウォノ2世の死去に伴う新王パク・ブウォノ3世(1749-88)の継承に対して先王の弟のマンクブミ(Mangkubumi)が他の王族と組んで対立¹³した。

両軍は王都の激しい争奪戦を繰り返した。当初は新王側についたVOC(→272)であるが、反乱の鎮圧に手をやき、上級主権者として調停に乗り出した。

この結果、1755年、VOCはマンクブミとギアンティ(Gianti)条約を結びマタラム王国は《スラカルタ家》と《ジョグジャカルタ家》に分割¹⁴され、領地は両者が衡平になるよう分けられた。由緒ある国王の称号もスラカルタ家は“ススフナン”、ジョグジャカルタ家は“スルタン”と分かち合った。

マンクブミとともに王家に反乱したパク・ブウォノ2世の甥のマス・サイド(Mas Said)は1757年のサラティガ(Salatiga)条約でマンク・ヌゴロ(Mangku Negoro)侯と名乗り、ススフナン家から独立¹⁵した。ジャワ王室は数回にわたり性懲りもなく継承戦争を行い、VOCという外敵を前に内乱で国力を消耗し、しかもその都度VOCの介入を招いた。無防備というよりはむしろ勝手に自滅していったとしか言い様がない。

マタラム王家の血統は続き王号を名乗るもVOCの傀儡^{かいらい}の“あやつり人形”にすぎなかった。マタラム王朝はVOCに“ひさし”を貸したことからついには“母屋”を乗っ取られた。

ところでマタラム王朝の衰退の原因となった王位継承問題であるが、ジャワ王家が王位継承戦争に血道をあげる原因はジャワ社会の相続の慣行に起因するところもある。ジャワ諸王朝の歴史は身内の継承争いの歴

¹² パク・ブウォノ2世から王国を譲渡されたVOCはその処置に当惑した。VOCは一旦王国の領地を受け取り、改めて王子に譲りパク・ブウォノ3世として即位した。しかしパク・ブウォノ3世の就任に対しては王族の反発が強く第三次王位継承戦争を引き起こした。この当時のVOCは商権の独占を欲したが、後の植民地帝国時代と異なり領地そのものには関心はなかった。パク・ブウォノ2世の譲渡によってもジャワ王室は継続したが、VOCが王室の上位に位置する最高主権者とする慣行が定着した。第三次王位継承戦争の結果、VOCの主導のもとに王国の分割が行われた。

¹³ 第三次王位継承戦争は王国に対するVOCの壟断への反発もあり、反オランダの民族抵抗の萌芽という指摘がある。⇒永積昭「オランダ東インド会社」

¹⁴ スラカルタ家とジョグジャカルタ家は称号のみならず領土、住民数においても均等になるように線引きされた。これが今日の中部ジャワ州とジョグジャカルタ特別州の境界線である。

¹⁵ マンク・ヌゴロ(Mangku Negoro)王家はススフナン家から領地を分割された。パンゲランの称号は王子の意味でススフナン、スルタンより格下げである。その後ジョグジャカルタ家から分離したバクアラム家の称号もパンゲランである。

史ともいえるほど揉め事が多いのは相続方法があいまいな事がその原因の一つである。

民話にも王位継承争いから身をひいた王子がやがて国王に迎えられているという話が多い。ジャワ戦争(→277)といわれるディポヌゴロ王子(→339)の反乱も王位継承争いの一面がある。

インドの叙事詩のラーマーヤナ(→945)とマハーバーラタ(→946)はインドネシアで馴染みの物語である。しかし本場のインドと異なり、インドネシアではマハーバーラタの方が人気は高い。これは魔物との戦いであるラーマーヤナよりは王族の骨肉の戦いであるマハーバーラタの方がより身近だからであろう。

儒教社会の長子相続と異なりヒンドゥー教社会では王権の相続のルールがなく、兄弟か子供のうち誰か一人が引き継ぐ。ラーマーヤナにおいても王位継承資格のあるラーマー王子は都を逃れ時機を待ち、最後に王位を手にする。

一般のジャワ社会の財産に関する親から子への相続の原則は均等相続である。農民の場合は土地細分過程がジャワ農民の貧困化を促進し、貧困の共有(→640)という別の問題をもたらす。王権の場合は分割不可能だけに始末が悪かった。

⇒131.ススフナン家

253. ジャワ王朝の終焉

マタラム王家はさらにスルタン家からパクアラム(Pakualam)家¹⁶が分家し、4王家が家名を保ち中部ジャワに直轄地を保有¹⁷したが、実質は後見人であるオランダ植民地政庁が派遣した理事官が財政を統轄したのみならず人事も関与した。

分割以降の王家は封建的称号を世襲する床の間の置物的存在であり、王国とはおこがましいので“公国”または“侯国”といわれ、王は“土侯”といわれた。

マタラム王国は 1746 年にパク・ブウォノ 2 世が王国を東インド会社(VOC)(→272)に譲渡して以降、VOCは王国の上級主権者として臨んだ。譲渡時点で王朝は終わったともいえる。その後のギアンティ条約による1755年の王国の分割時点で終わったとも言えるし、1945年の第二次世界大戦後、インドネシア独立で領土が共和国に併合されるまで続いたともいえる。

今日のジャワ王家に残されたのはクラトン(→121)などの資産と家名だけである。しかし王家の子孫はジョグジャカルタ(→120)とスラカルタ(→130)で伝統文化の偉大なるパトロンとしてジャワ人の尊敬と敬愛を繋ぎ止めている。

あるいはマタラム王朝まだ継続しているとも言える。何故ならジョグジャカルタは特別州として州の特権の一部として州知事は王家の後継者が今日も世襲¹⁸しているからである。

¹⁶ ラッフルズはオランダのジャワ統治に反発し、新政策を打ち出した。しかし王家を弱体化し分割統治するという観点ではラッフルズはVOCの延長にあった。ラッフルズは己のジャワ統治に従順でなかったジョグジャカルタ家に対する懲罰として、ラッフルズに協力的であったハムンク・ブウォノ2世王の弟パンゲラン・ノクサウモに新しい王家を分立させた。

¹⁷ 4王家直轄領地は総称して土侯領といわれる。オランダの統治下にあったが、植民地政庁直轄ジャワの他の地域よりは土侯領の自治の度合いが高く民族主義が育まれた。ジャワのナショナルアイデンティティがジャワ王室の旗印にもとに集合したともいえる。

¹⁸ インドネシアの州知事は中央政府の任命制であったが、ジョグジャカルタ特別州では州知事の州議会での選出権が認められている。この結果、ジョグジャカルタ州では初代州知事はハムンク・ブウォノ9世が選出され、2代目州知事はパクアラム家当主が選出された。現在の州知事はハムンク・ブウォノ9世の息子、ハムンク・ブウォノ10世である。最近ではジョグジャカルタ州の世襲制を可能にする制度に対して中央政府に批判的意見も出始めている。

日本が近代国家として変身する明治維新の際、王政復古の掛け声で京都に閉塞^{へいそく}していた天皇がナショナル・アイデンティティとしての役割を果たした。インドネシアにおいてもジャワ王家に対する国民の敬慕を民族解放に結集しようとする考えもあった。

結局、ジャワの王室はインドネシア独立の神輿^{みこし}とはなりえなかった。なぜならジャワ王室の領域はジャワ島であり、民族主義者の意図する《インドネシア》は《ジャワ島》を越える存在であった。ジャワ以外の多民族からなるインドネシアの独立と統一のためにはジャワ王家は問題をむしろ複雑にする存在であった。

しかしながらジャワ王室がインドネシアのナショナル・アイデンティティに与えた影響は民族主義運動においても無視できない。民族主義思想の勃興の中で王家一族のブディ・ウトモ(→286)は重要な役割を担い啓蒙思想に努めた。タマンシスワ(→289)も王族の一員が始めた。

オランダとの独立戦争においてインドネシア共和国はジョグジャカルタを臨時首都として戦った。ジョグジャカルタ王家が物質的、精神的に共和国の支えとなった。独立後、スルタンのハムンク・ブウォノ9世(→445)はスカルノ政権の主要閣僚を務め、スハルト政権の下では副大統領も務めた。

スハルト政権崩壊後の昏迷する政治情勢の中でのハムンク・ブウォノ10世(9世の息子)が脚光をあび動向が注目された。ジョグジャカルタ州知事ハムンク・ブウォノ10世は大統領候補のダークホースとして存在し続けるだろう。